

NEWS

2013.05.21 TUE 12:09

本物そっくりのスケッチが描ける、35ドルの「カメラ・ルシダ」

見ている画像をそのままトレースすることができる「カメラ・ルシダ」。19世紀の装置を低価格にした現代版が、Kickstarterで人気を呼んでいる。

BY TOMOKO MUKAI/GALILEO

WIRED NEWS (UK)

巨匠たちのように優れた絵画を描きたいと思ってきた人に、その夢をかなえる装置がある。見ている画像をそのままトレースすることができる「カメラ・ルシダ」だ。

カメラ・ルシダ (camera lusida、ラテン語で「照らされた部屋」という意味) はかつて、アーティストや建築家、イラストレーターなど、実物をもとに絵を描くあらゆる人にとっての一般的なツールだった。英国の物理学者ウィリアム・ハイド・ウォラストンが1807年に特許を取得したもので、非常に単純な原則で機能するツールだ。調節アームに固定された四面ガラスプリズムを覗き込むと、絵を描く紙の上に画像が映し出されており、驚くほど簡単に画像をなぞることができる。



カメラ・ルシダの使い方、1830年頃の図。画像はWikipedia

シカゴ美術館附属美術大学のバプロ・ガルシアと、カーネギーメロン大学のゴーラン・レヴィンは、このツールを現代によみがえらせた。安価でシンプルな現代版「NeoLucida」を製造するために、彼らは「Kickstarter」で資金を募っている。

NeoLucidaの携帯性、実用性、そして価格は非常に素晴らしい。Kickstarterの出資者に対するNeoLucidaの価格はわずか35ドルだ。このアンティークなツールに大きな改善をもたらしているのが、調節可能なノブと、柔軟性のあるグースネック・アームだ。

Kickstarterでは、非常に短時間で大きな成功が実証された。開始からわずか2日間で、**15,000ドル**の目標が何度も達成されたのだ。現在、およそ**100,000ドル**の出資が約束されている。ガルシア氏とレヴィン氏は最新情報を掲載して、最初の**2,500個**がすでに出荷されたことを明らかにしなければならない。また、「NeoLucidaのオープンソースのデザインを、有能で理解ある商業パートナーに渡す」必要もでてくるだろう。そうすれば、NeoLucidaの製造が継続される可能性が生まれてくる。

なお、ガルシア氏とレヴィン氏は、芸術家のデイヴィッド・ホックニーが著書『Secret Knowledge: Rediscovering the Lost Techniques of the Old Masters』（邦題：秘密の知識－巨匠も用いた知られざる技術の解明、青幻舎刊）のなかで展開した、賛否を呼んだ理論に賛同している。その理論とは、啓蒙時代における西洋美術のすばらしい発展は、それと平行して起こった光学技術の進歩によって実現されたというものだ。

具体的にはその時代、より優れたレンズや鏡のほか、外の風景の像を壁面に逆さまに映す大型装置「カメラ・オブスクラ」（日本語版記事）などにより「実物どおりの絵」を描くことが、かつてないほど容易になった。カメラ・ルシダはこうしたツールのひとつだった。